様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００９１８

研究課題名（和文）前近代エジプト農村社会の長期持続構造と環境・社会変動へのレジリエンス

研究課題名（英文）A longue duree structure in premodern Egyptian rural society and its resilience to social and environmental changes

研究代表者
高橋　亮介（Takahashi, Ryosuke）

東京都立大学・人文科学研究科・准教授

研究者番号：１０７０８６４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、前近代エジプト農村部における農業・水利実践と行政の実態、さらに環境的・社会経済的な変動に対する農村社会や国家の諸制度の反応のあり方を、異なる時代の史料と地理情報をも加味して用いて明らかにしようとした。長い時代を視野に収めた共同研究により、他時代の状況を史料の欠落を補うための解釈上の補助として有益であるが、典拠とするには慎重さが求められることが確認された。その上で、専門性を維持しつつも広い読者に向けた概説的記述、同時代だけでなく他時代のエジプト史家にも参照されることを意識した個別の研究を公にすることができた。また、国内の前近代エジプト史研究者による今後の共同研究の方向性を模索した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
後７世紀のイスラーム勢力のエジプト支配を境に、ギリシア・ローマ時代とイスラーム時代に分たれるエジプトでは、主要な使用言語がギリシア語からアラビア語へと切り替わることもあって、２つの時代の史料を統合的に捉えようとする研究姿勢は希薄であった。こうしたエジプト史を扱う研究分野が分断されている状況に対して、双方の史料の特徴や限界を加味しつつ、前近代エジプト農村社会の状況を多面的に理解しようとした点に本研究の意義がある。同時に、静態的なエジプト社会像の析出にとどまらないように、環境的・社会経済的な危機を迎えたとされる時代に特に注目した。

研究成果の概要（英文）：This research project has aimed to clarify the long-term characteristics of the agricultural and hydraulic practices and administration in pre-modern rural society in Egypt. It also has attempted to consider how rural society and state institutions reacted to environmental and socioeconomic changes. In order to pursue these issues, we employed not only contemporary sources but also sources from different periods and geographical information. We confirmed that the situation in other periods can be helpful for our interpretation as it fills our ignorance due to the lack of evidence. However, caution is required in using these sources as definitive evidence. As a result of this project, we published several studies on related topics not only for specialists but also for the general readership. We also sought directions for possible future research.

研究分野：西洋古代史

キーワード：エジプト　農村　文書行政　環境史　社会経済史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の歴史研究では時代と地域を問わず、環境史への関心、社会経済史研究に自然環境の変動を組み込もうとする動きが高まっている。このような動向を受け、またエジプトの社会経済史研究が限定された時代の史料を扱い、その時代の特徴を析出しようとする傾向にあるのに対して、研究代表者と分担者は、前 3 世紀から後 17 世紀にかけての行政文書の分析により、環境および農耕水利実践の長期的な変化を明らかにするべく共同研究を行ってきた。この共同研究では各自が専門とする時代における文書史料の内容と残存状況を共有し、環境と農業生産の状況の変遷を通時的に描こうとしてきた。その際、時代ごとに文書行政が把握しようとする対象、文書作成の目的、残存状況が大きく異なり、通時的な変化を追うことの困難さが課題として浮かび上がってきた。例えば、ある作物の栽培記録がある時代には存在するが、別の時代には存在しない、という比較が、農業生産の変化を追うことになるのか、という問題である。断片的な記録を単純に時系列に並べると、このような単純な議論に陥ってしまう。この問題を克服しようとしたのが本研究の背景にある。

２．研究の目的

本研究の目的は、前近代エジプト農村部における農業・水利実践と行政の実態を再構成すること、さらに環境的・社会経済的な変動に対して農村社会や国家の諸制度がどのように反応したかを検討することである。これまで前近代エジプトの環境と農業生産の状況を通時的に描くことは困難であった。それは各時代の史料において、記録されている内容が異なっており、互いに通時的な比較ができないためである。本研究では、異なる時代の文書史料と近現代の地理情報を相補的に用いるという独自の方法により、長期持続のなかのエジプト農村社会モデルの構築を目指す。そして、エジプト農村社会が環境的・社会経済的な変動期にどのように変容し、あるいは影響を受けなかったかを明らかにすることで、農村社会のレジリエンス（弾力性・強靭性)という観点から新たなエジプト史像を描き出すことを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、前近代エジプト農村社会を異なる時代の文書史料と近現代の地理情報を相補的に用いて再構成し、さらに一時的に生じた特殊状況の影響を農村社会がどう受け止めたかを検討するものである。本研究は研究代表者(高橋)と 2 人の研究分担者(亀谷・熊倉)による共同研究であり、各人が異なる時代を担当し、前 3 世紀から 18 世紀までを広くカバーする。

エジプトのなかで特に注目されるのは、相対的に史料に恵まれるエジプト中西部のファイユーム地方である。同地方は前 3 世紀の干拓により耕地が拡大し、前近代を通じて「豊かな土地」という評価が同時代人および研究者から与えられてきた。しかし、古代のギリシア語史料はやがて砂漠に呑み込まれる周縁部に集中しており、耕作者が作成した農地貸借契約や行政の末端の役人が作成した徴税領収書・帳簿などが残るのみである。この状況はファイユーム外でも変わらない。イスラーム時代に入るとファイユーム中心部の通年灌漑を利用した耕作された商品作物についての記録が目立つ。12 世紀以降には、中央政府が作成した土地・水利台帳といった高位行政に関わるものがファイユーム内外について得られる。以上の史料残存の特徴に鑑み、本研究は分析の対象をまずファイユームに限定し、徐々に対象地域を広げていく。具体的な検討項目は農 地の測量と税額の決定、徴税権の保有者と徴税の実態、耕作者と徴税者との交渉、灌漑施設の維持、取水権とそれをめぐる紛争と解決である。

長期持続モデルを構築するための史料は、各自が担当する時代のなかで政治および自然環境的に比較的安定した時期に属するもの、また情報量の多いものを選択し以下の史料・テーマを重点的に考察する。高橋は、ローマ帝国盛期の 1-2 世紀前半のテプテュニスおよびテアデルフィア村からの家族文書と台帳、1970 年以降研究がない農民の代表「長老たち」の役割の分析。亀谷は、表形式という独特の様式をもつアラビア語パピルス文書の分析(7-10 世紀)、アイユーブ朝期の役人ナーブルシィーの著した『ファイユームの歴史』(12 世紀)。熊倉は、14-18 世紀の文書史料や法廷台帳に残される村落間の水争いの記録から、水争いの要因や調停のプロセス、そこに登場するアクターについて考察する。

その一方で、各自が担当する時代における環境および社会経済的な特殊状況を検討し、その時期の農村社会の状況を明らかにする。検討を予定していたテーマは以下のものである。高橋は 2・3 世紀に生じた疫病の影響、3・4 世紀のファイユーム周縁部の衰退。亀谷は、7 世紀のイスラーム支配開始に伴うシリア・アラビア地方との結びつきの強化、10 世紀の地中海・インド洋貿易の 拡大に伴う亜麻栽培への偏重の影響。熊倉は 14 世紀の黒死病による影響、16 世紀のオスマン帝国への編入の影響である。

４．研究成果

上記の目的を達成すべく、計画された方法に基づいて研究を行った。研究代表者・分担者の各々が設定した課題を追求し、その過程で意見交換を行い、史料の特徴および他の時代での類似

史料の有無や類似する史料がない場合はどのような点で参考になるかについて討議を重ねた。そこで得られた知見は、各自のエジプト農村社会についての理解を相当深めたが、実証研究において他時代の状況をそのまま典拠として用いるには慎重さが求められることが確認され、研究当初の目的である長期的なエジプト農村社会モデルを提示するには至らなかった。したがって今後の共同研究および各人が追求すべき課題として残された。しかし、研究課題を追求するために設定された各研究テーマについては予備的な史料状況の確認や先行研究の把握にとどまり活字あるいは口頭での研究発表に至らなかったものもあるが、エジプト農村社会のあり方を示した論考や、環境的・社会経済的な変動期における状況を論じた実証研究の発表という成果を得た。以下、年度ごとに成果の概略を記述する。

(1)2020 年度

新型コロナウィルス感染症の流行により海外での史料・文献調査の中止を余儀なくされたが、国内で入手可能あるいはインターネット上で閲覧可能な文献・史料を中心に、通時的なエジプト農村社会再構成のために比較・相互参照可能な史料類型および事象を検討するという予備調査に重点をおいた。そしてナイル川の水位など古気候学の成果を大いに参照すべきであるが、それらのデータに牽強付会するような史料解釈をすべきではないこと、各地で進む気候学と歴史学との連携の成果については広く参考とすべきであるが、農耕および生活をナイル川の流水に依存するエジプトにおいては気温の変動よりもナイル川の氾濫を左右する要因に特に気をつけるべきといった基本的な方針を確認した。

具体的な成果としては、研究代表者の高橋は、エジプト農村社会の理解にとって不可欠なテーマについていくつかの成果を発表した。すなわちヘレニズム時代の小規模集落アコリスでの多様な経済活動を明らかにする採石場の調査報告、ローマ時代の実務文書における個人の表記の仕方の特徴を当時の身分制度と関連づけて理解するべきであるとの見解をしめす学会報告、ローマ時代にエジプトを経由して行われたインド交易の重要性を解く論文の翻訳である。研究分担者の亀谷はアッバース朝の成立を画期としたイスラーム社会の成立の状況を解説した書籍を、熊倉は中世後期の土地記録のデータベースを作成しつつ、同時期ファイユームの主要作物の変化に関する論文を発表した。

(2)2021 年度

研究期間前半の目標である、前近代エジプト農村社会の静態的な特徴を析出すべく、各自が担当する時代について考察を深めた。研究代表者の高橋は、著書 The Ties That Bind: the Economic Relationships of Twelve Tebtunis Families in Roman Egypt を出版した。これは史料に恵まれた紀元後 2 世紀のテプテュニス村（ファイユーム地方）における地主層と農民との複雑な人間関係を、農地貸借、金品貸借、労働力の組織という 3 つの観点に注目して、再構築したものである。その結論は今後の前近代エジプト農村社会史研究において、村落のあり方の一つのモデルとして参照されることが期待できる。また『岩波講座世界歴史』３巻に寄稿したローマ帝国社会全体の女性と性差の諸問題を論じた論考においても、エジプト農村部から得られる知見を盛り込んだ。研究分担者の亀谷、熊倉もそれぞれ、初期イスラーム史の文脈の中でのエジプトの農村部の位置付け、オスマン帝国の支配下における農地管理と農村統治の特徴にふれる論説を執筆した。いずれも前近代のエジプトの静態的な特徴と当該時代の特徴の両方を意識したものであり、2022 年度に出版された『岩波講座世界歴史』８巻および 13 巻に収録されることとなった。

(3)2022 年度

研究期間前半の目標である前近代エジプト農村社会の静態的な特徴の析出に関する成果発表を継続し、さらに研究期間後半の目標となっていた変動期の状況について各自が考察を深めた。研究代表者の高橋は、プトレマイオス朝期エジプトについて農村社会の状況をも視野に入れた概論を執筆し、またローマ期エジプトにおける農村および農業・行政のみならず社会の全体像を描き出す高度な英文概説書を翻訳した。さらに、これまで農村部において経済的にも大きな力を持ちつつも、ローマ帝国支配下で衰退したと見なされていた地方神殿の状況を再興する論文を発表した。また、これまで検討のできていなかった紀元 4・5 世紀の史料、とりわけ中エジプト、ヘルモポリテス・ノモス(現在のミニア県周辺)また西部砂漠のオアシスにおける史料の収集・検討を重点的に行った。研究分担者の亀谷、熊倉もそれぞれ、執筆の大部分は前年度に終わっていたものの『岩波講座世界歴史』に寄せた論考のなかでエジプト農村部の状況に触れ、さらに農村部における貨幣利用(亀谷)、後二千年紀前半における地中海地域の土地と農業を巨視的に捉える試み(熊倉)をテーマに分析を進めた。

(4)2023 年度

本研究の最終年度にあたる 2023 年度は研究計画に則り、変動期の状況について研究代表者と分担者が研究を進め、課題全体の総括を行った。研究代表者の高橋は 4 世紀の状況の分析を進め、中エジプトの村落に関する地誌学的研究を学術論文として発表し、同じく中エジプトにおける土地所有のあり方が、同時期に生じた北部のファイユーム地方の耕地減少と結びついている可能性を指摘する学会発表を行った。研究分担者の亀谷は会計文書の書式についての分析を進

め、熊倉は 14 世紀末の変動期についてエジプト以外の状況も視野に入れて学会報告を行ったほか、中世のナイルデルタ西部に関する論考を発表し、比較史的展望をもち中世エジプトの特徴的な土地所有制度であるイクター制を概観する発表を行った。

１月には研究の総括として、これまでの成果と課題を共有し、今後の研究の方向性を考えるべく、研究代表者・分担者に加え、ヘレニズム・ローマ時代エジプトの専門家アンドリュー・コナー氏(オーストラリア・モナシュ大学)を招聘し、国内の前近代エジプト史研究者を交えた国際ワークショップ(Round Table: Religion, Economy, and Imperial Power in Premodern Egypt and Beyond)を開催した。そこで得られた一つの方向性は長期的な視野での砂漠地帯を研究することの重要性である。砂漠地域はナイル河谷と比べ厳しい環境にあるが、それでも歴代のエジプトの支配者は、さまざまな理由から砂漠地帯に関心を示し、そこで活動を行った。人為的な力が砂漠の集落・耕地・道の維持に不可欠であることから、砂漠への関わり方に各支配者の意思が明白が現れ、ナイル川沿いの農村地帯とは違ったかたちでエジプト支配の特徴が見出せる可能性があるのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Ryosuke Takahashi	４．巻 4
２．論文標題 The Location and Size of Prektis in the Hermopolite nome	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Pylon: Editions and Studies of Ancient Texts	６．最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.48631/pylon.2023.4.101702	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高橋亮介	４．巻 51
２．論文標題 書評 M. Langellotti and D.W. Rathbone (eds.), Village Institutions in Egypt in the Roman to Early Arab Periods, Proceeding of the British Academy 231, Oxford University Press, 2020, Pp.208.	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『人文学報』歴史学・考古学	６．最初と最後の頁 65-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Kumakura Wakako	４．巻 2
２．論文標題 The Tax Survey Record of the First Year of Ottoman Rule in Egypt	５．発行年 2022年
３．雑誌名 The Mamluk-Ottoman Transition: Continuity and Change in Egypt and Bilad al-Sham in the Sixteenth Century	６．最初と最後の頁 273～306
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14220/9783737011525.273	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋亮介	４．巻 444
２．論文標題 ナイル川のニンフ イシドラの哀悼文を読む	５．発行年 2021年
３．雑誌名 地中海学会月報	６．最初と最後の頁 5-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yoshiyuki Suto, Ryosuke Takahashi, Sugihiko Uchida, Takuro Ogawa	４．巻 1
２．論文標題 Epigraphical Survey in the New Minya Quarry	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Akoris 2019: Preliminary Report	６．最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ラウル・マクラフリン(著)、高橋亮介・赤松秀佑(訳)	４．巻 517-9
２．論文標題 ローマ帝国におけるインド洋交易の位置づけ：古代世界における東方交易の経済的・財政的重要性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文学報　歴史学・考古学	６．最初と最後の頁 140-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 高橋亮介
２．発表標題 アンティノポリスの建設とエジプト社会
３．学会等名 第73回日本西洋史学会大会小シンポジウム１「移動するエージェンシー：古代オリエント・地中海世界における諸相」
４．発表年 2023年

１．発表者名 高橋亮介、内田杉彦、小川拓郎
２．発表標題 2022年度ニューメニア採石場調査
３．学会等名 アコリス考古学プロジェクト2023
４．発表年 2023年

１．発表者名 高橋亮介
２．発表標題 書評報告：石田真衣『民衆たちの嘆願：ヘレニズム期エジプトの社会秩序』大阪大学出版会、2022年
３．学会等名 2023年度西洋古代史サマーセミナー
４．発表年 2023年

１．発表者名 Ryosuke Takahashi
２．発表標題 Greek Texts from New Minya and North Saqqara
３．学会等名 Round Table: Religion, Economy, and Imperial Power in Premodern Egypt and Beyond
４．発表年 2024年

１．発表者名 Wakako Kumakura
２．発表標題 Oriental Despotism or Bottom-up Approach? A Discussion on the Irrigation Maintenance System of the Nile in Ottoman Egypt
３．学会等名 The Seventh Biennial Conference of East Asian Environmental History (EAEH 2023)（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Wakako Kumakura
２．発表標題 Turbulence at the End of the Fourteenth Century as Seen in the Inventory Estate of a Khorasan Merchant
３．学会等名 Omar Ali Archival Practices Materialised: The Persian and Persianate Documents (13th-14th centuries) from al-Haram al-Sharif in Jerusalem（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 熊倉和歌子
２．発表標題 中世エジプト・イクター制下の土地と環境をめぐる権力関係
３．学会等名 第121回史学会大会シンポジウム「土地所有の世界史」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 熊倉和歌子
２．発表標題 マムルーク朝時代エジプトのアラブ部族と灌漑の維持管理
３．学会等名 日本中東学会第38回年次大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 熊倉和歌子
２．発表標題 中近世エジプトのアラブ部族に関する再考：水利社会、国家との関係から
３．学会等名 地中海学会研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋亮介
２．発表標題 ローマ期エジプトにおける家族とジェンダーをめぐる諸問題：近年の動向と課題、血統意識の形成をめぐって
３．学会等名 上智大学史学会第70回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 周藤芳幸，高橋亮介，内田杉彦，小川拓郎
２．発表標題 2019年度ニュー・メニア採石場調査
３．学会等名 アコリス考古学プロジェクト2020公開シンポジウム：エジプト領域部研究の新展開
４．発表年 2020年

〔図書〕　計10件

１．著者名 Katherine Blouin, Frederic Guyot, Claire Somaglino, Robert Schiestl, Marie-Francoise Boussac, Berangere Redon, Damien Agut-Labordere, Sylvain Dhennin, Ramez Boutros, Isabelle Hairy, Sobhi Bourderbala, Heba Mostafa, Ben Outhwaite, Wakako Kumamura, Lucile Haguet, Rachel Mairs, Heba Abd el Gawad, Mona Abaz	４．発行年 2024年
２．出版社 Cambridge University Press	５．総ページ数 676
３．書名 The Nile Delta Histories from Antiquity to the Modern Period	

１．著者名 周藤芳幸編、安川晴基、河江肖剰、田澤恵子、中野智章、高橋亮介、山花京子、長田年弘、佐藤昇、師尾晶子、澤田典子、佐藤育子、川本悠紀子、芳賀京子、小坂俊介、福山佑子、桜井万里子	４．発行年 2022年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 464
３．書名 古代地中海世界と文化的記憶	

１．著者名 ピーター・パーソンズ、髙橋亮介	４．発行年 2022年
２．出版社 知泉書館	５．総ページ数 514
３．書名 パピルスが語る古代都市	

1．著者名 長谷川岳男、阿部拓児、師尾晶子、齊藤貴弘、澤田典子、高橋亮介、岸本廣大、志内一興、長谷川敬、池口守、樋脇博敏、南雲泰輔	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 328
3．書名 はじめて学ぶ西洋古代史	

1．著者名 大黒俊二、林佳世子、大月康弘、清水和裕、佐藤彰一、森山央朗、森本一夫、三佐川亮宏、中谷功治、亀谷学、佐藤健太郎、三村太郎、高野太輔	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 314
3．書名 西アジアとヨーロッパの形成 8～10世紀	

1．著者名 林 佳世子、上野雅由樹、近藤信彰、真下裕之、小笠原弘幸、藤井守男、太田信宏、米岡大輔、桝屋友子、鴨野洋一郎、熊倉和歌子	4．発行年 2023年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 288
3．書名 西アジア・南アジアの帝国 16～18世紀	

1．著者名 Ryosuke Takahashi	4．発行年 2021年
2．出版社 University of London Press	5．総ページ数 195
3．書名 The Ties That Bind: the Economic Relationships of Twelve Tebtunis Families in Roman Egypt	

1．著者名 大黒俊二、林佳世子、南川高志、藤井崇、三津間康幸、春田晴郎、池口守、髙橋亮介、田中創、南雲泰輔、大谷哲、井上文則	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 306
3．書名 ローマ帝国と西アジア 前3-7世紀	

1．著者名 三浦徹、亀谷学、菊池重仁、大月康弘、妹尾達彦	4．発行年 2020年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 304
3．書名 750年　普遍世界の鼎立	

1．著者名 Stephan Conermann, Toru Miura, Mohammad Gharaibeh, Daisuke Igarashi, Takao Ito, Anna Kollatz, Manami Kondo, Wakako Kumakura, Toshimichi Matsuda, Christian Mauder, Nobutaka Nakamachi, Takenori Yoshimura	4．発行年 2021年
2．出版社 V&R Unipress	5．総ページ数 326
3．書名 Studies on the History and Culture of the Mamluk Sultanate (1250-1517)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	亀谷　学 (Kameya Manabu) (00586159)	弘前大学・人文社会科学部・准教授 (11101)	
研究分担者	熊倉　和歌子 (Kumakura Wakako) (80613570)	慶應義塾大学・経済学部（三田）・教授 (32612)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Round Table: Religion, Economy, and Imperial Power in Premodern Egypt and Beyond	2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オーストラリア	モナシュ大学			
英国	ロンドン大学古典学研究所			